靉光の初期作品に関する一考察

著者名(日)	伊藤 紀之
雑誌名	共立女子大学家政学部紀要
巻	57
ページ	1-10
発行年	2011-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002206/

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

共立女子大学家政学部紀要　第57号　(2011)

靉光の初期作品に関する一考察

A study on the early works in a painter Ai-Mitsu.

伊藤　紀之

Noriyuki ITO

1．はじめに

画家、靉光（あいみつ）については近年各地で展覧会が開かれ、図録や解説が多数ある。彼の代表作とされる自画像やシュルレアリスムの問題作はよく知られている。

靉光の略歴を簡単に触れておく。明治40年（1907）生～昭和21年（1946）没。広島出身の画家、本名、石村日郎、雅号は靉川光郎、靉光。出生地は広島県山県郡千代田町壬生字梅ノ木、叔父石村梅蔵の養子になり広島市鉄砲町に住む。幟町尋常小学校、東高等小学校を卒業後、市内の印刷所で見習工になる。大正12年（1923）大阪へ出て絵画を習う。この頃より靉川光郎、靉光を名乗る。大正13年（1924）春に上京、太平洋画会研究所に入る。昭和６年（1931）頃より「池袋モンパルナス」と呼ばれた界隈で、仲間たちと芸術論を交わしながら自らの画風を模索し、昭和13年（1938）には日本のシュルレアリスムの傑作といわれる〈眼のある風景〉、大戦末期に強烈な存在感を放つ自画像を残し戦地へ赴いた。終戦を迎えるが上海で38歳の若さで戦病死した。ふるさとに残されていた作品は原爆で焼失し、現存する作品は必ずしも多くない。

大正13年（1924）上京、太平洋画会研究所入学後、谷中周辺から昭和６年（1931）長崎町に至る靉光の行動は、諸説あり不明の部分が多い。知られている作品数もきわめて少ない。太平洋画会研究所の教育はデッサンを重視していた。デッサンは形だけでなく対象物をマッス（塊）でとらえ、微妙な段階の明暗を木炭の濃淡で表現することにある。その特徴は彼の初期の石膏像「ラオコーン」や「とげ抜き」の作品に表れている。それ以外に現存する彼の作品は少なく、制作年代が不明なものが多い。

現存する作品の内、「風景　水彩・紙48.0×55.0、制作年代不詳」「静物　水彩・紙31.0×37.0、1926－27　信濃デッサン館」は画風からデッサンを始める前の作品ではないかと感じられる。また、「父（石村初吉）の像　木炭・墨・紙、1917」「祖母（石村キク）の像　木炭・紙、1928」「養父（石村梅蔵）の像　墨・鉛筆・紙、制作年代不詳」などの肖像作画があるが、絵画作品とは異質と考えられる。

そのような観点から現存の靉光の作品を見ると、大正14年（1925）頃のデッサンから昭和４年（1929）「コミサ（洋傘による少女）　油彩・キャンバス、広島県立美術館」や「屋根の見える風景　油彩・キャンバス」までの間の作品は知られていない。

本報では、未評価、未検討の作品であるが、この空白の時代に描かれたとする作品を事例として初期作品を検証したい。

2．絵画資料の概要

作品の画像を図１に示す。レンガ塀越しに樹木と小屋らしきものが描かれている。画面上にサインはない。生茂った樹木の表現に特徴がある。画面右下に全体の作画と異なるタッチがある。

板絵の裏に「大正十五年（1926）滝野川　靉光」の墨書がある。(図２)
寸法：20.0×28.0cm
画材：油彩とみられるが、他の画材も使われている可能性がある。
板の材質：杉材、二枚の板を上下に接いでいる。板の厚みは５～７mm不揃い。裏面の鉋による面取りは段差があり、市販の画材ではなく手作りと考えられる。

この資料を次の３点から検討する。
①作品の表面、裏面の赤外線写真による検討
②裏面墨書の筆跡と、靉光自筆の手紙・メモの比較検討
③画題、滝野川について既存年譜の検討

2－1　赤外線写真による検討

赤外線写真は、東京文化財研究所の紹介をえて、2010年７月８日に東京藝術大学大学院　文化財保存学保存修復油画研究室において、木島隆康教授の指導のもとに撮影した。撮影目的は作品の右下にある全体の画風と異なるタッチの解明にあったが、同質の絵具からは目視以上の差異は認められなかった。また、画面全体の下図および裏面の文字の下書きも認められなかった。赤外線写真の結果を示す。(図３-１、３-２、３-３）鉛筆や墨の下書きがあれば、赤外線写真に写るが、それらは一切認められなかった。板の裏面の墨書にも下書きが認められなかった。迷いのない筆跡は、筆者自身の特徴が現われていると考えられる。

図１　絵画資料の画面

2－2　筆跡の検討

「大正十五年　滝野川　靉光」と書かれた文字と、既刊図版にある靉光の自筆の書簡、メモに示されている文字を比較し検討した。「大正十五年　滝野川」の８文字について比較検討を行い、「靉光」の筆跡は検討から除いた。既刊図版から［滝］の文字は見つからなかったが、他の７文字は複数の事例が認められた。印刷図版は網版で製版され、不明瞭なものが多かったが、比較的明瞭な次のa～gまでの文献を参考にした。

a. 菊地芳一郎『靉光』時の美術社（1965）
b.「靉光」みづゑ　no.877　4月号（1978）
c.「靉光　青春の光と闇」　広島県立美術館（1988）
d.「靉光　揺れ動く時代の痕跡」　徳島県立美術館（1994）
e.「靉光」　芸術新潮　8月号（1995）
f.「靉光　人間のいる絵」　南天子画廊（1998）
g. 生誕100年「靉光展」　毎日新聞社（2007）

次に示す、それぞれの文字をa～gの文献の書簡、メモ書きから抽出した。

図２　絵画資料の裏面

図３－１　画面の赤外線写真

図３－２　画面右下の赤外線写真

図３－３　裏面、赤外線写真

［大］　昭和19－20年（1944－45）妻きゑへの軍事郵便：a.e.g.（図4-1）（図4-2）（図4-3）

［正］　昭和18年（1943）ハルピンから妻きゑへのハガキ：a.b.（図5-1）（図5-2）（図5-3）

［十五］昭和8年（1933）上海から桃田（野）きゑへのハガキ：c.g.（図6-1）（図6-2）

昭和8年（1933）芳名録の書き込み：g.（図7-1）（図7-2）

昭和13年（1938）展覧会場の見取り

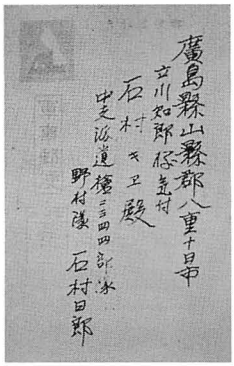

図4－1　妻きゑへの軍事郵便

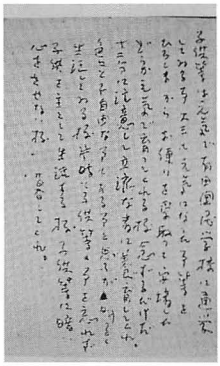

図4－2　通信面

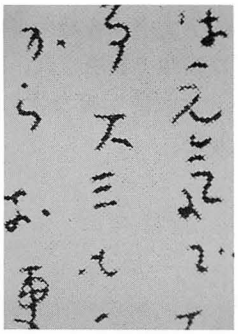

図4－3　［大］

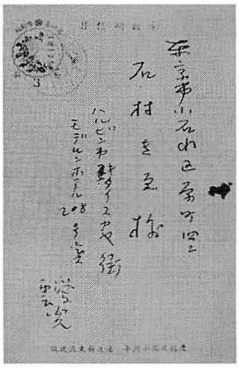

図5－1　ハルピンから妻きゑへのハガキ

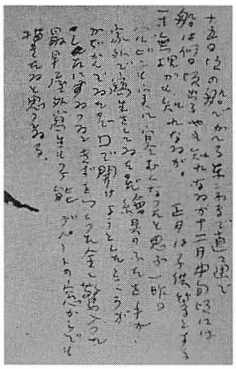

図5－2　通信面

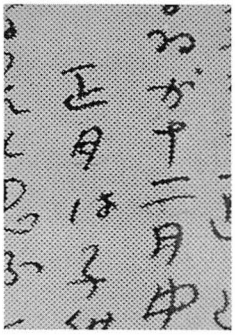

図5－3　［正］

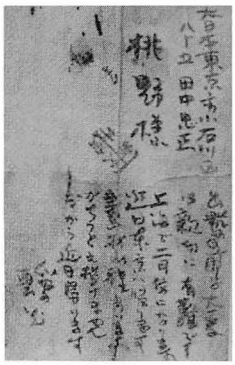

図6－1　上海から桃田(野)きゑへのハガキ

図6－2　［十五］

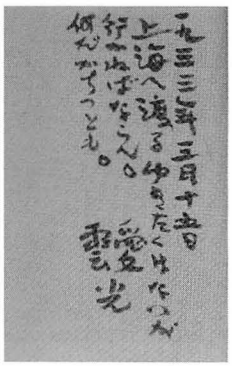

図7－1　芳名録の書き込み

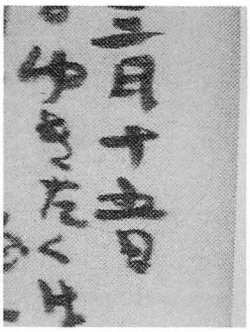

図7－2　［十五］

図：d.f.g.（図８-１）（図８-２）
昭和18年（1943）ハルピンから妻きゑへのハガキ：a.b.（図９）

［年］ 昭和13年（1938）展覧会場の見取り図：d.f.g.（図10）
昭和８年（1933）芳名録の書き込み：g.（図11）
年代不明：スケッチブック、マントヒヒ：d.g.（図12－1）（図12－2）

［滝］ ［注意］からの合成：昭和19－20年（1944－45）妻きゑへの軍事郵便：a.e.g.（図13）

［野］ 昭和８年（1933）上海から桃田（野）きゑへのハガキ：c.g.（図14）

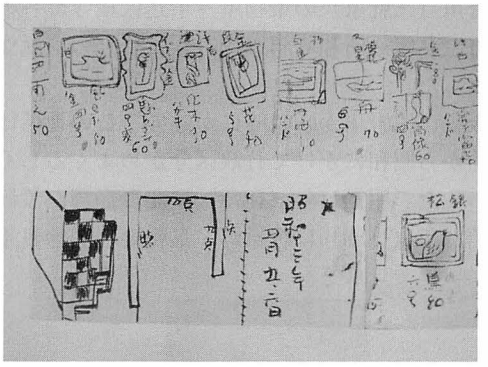

図８－１　展覧会の見取り図

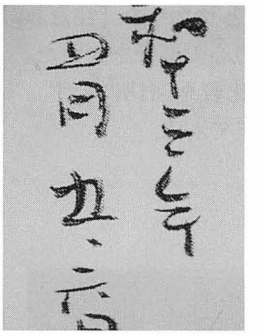

図８－２　［十］、［五］

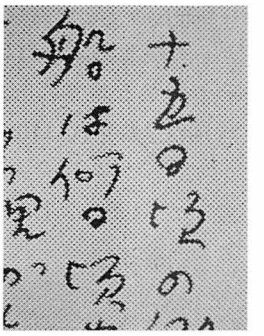

図９　ハルピンから妻きゑへのハガキ［十五］

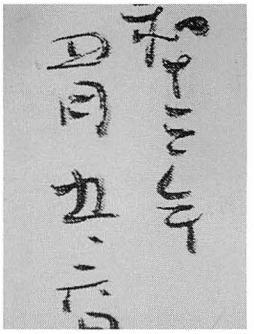

図10　展覧会の見取り図、［年］

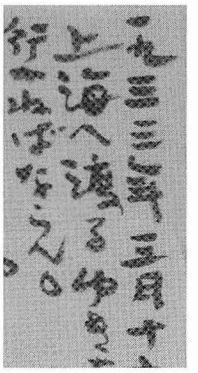

図11　芳名録の書き込み、［年］

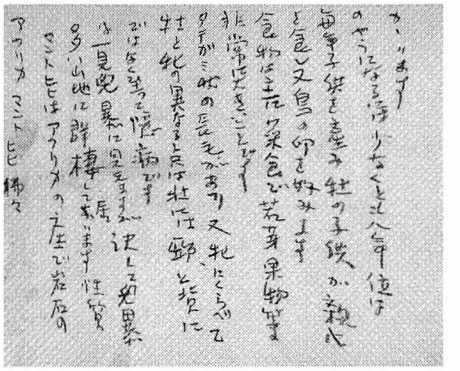

図12－1　スケッチブック、マントヒヒ

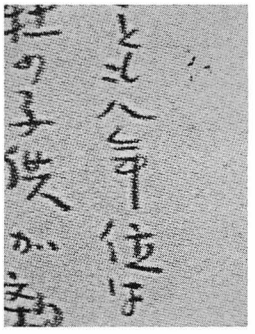

図12－２　［年］

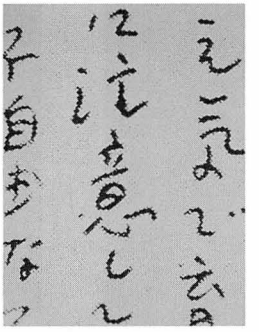

図13　妻きゑへの軍事郵便、［意］と［意］

図14　上海から桃田(野)きゑへのハガキ、［野］

昭和13年（1938）柴野利秋へのハガキ（冠省、、、）：g.（図15－1）（図15－2）
昭和13年（1938）柴野利秋へのハガキ（丸木氏、、、、）：g.（図16－1）（図16－2）
［川］　昭和13年（1938）柴野利秋へのハガキ（冠省、、、）：g.（図17）

「滝」の文字は漢字のヘンとツクリを「注意」から合成した。なお「意」の心の部分を除いた。その結果と靉光の筆跡との比較を図18に示す。靉光の筆跡年代は1933～45年である。

3．既刊の年譜の検討

大正13年上京後、下谷区真島町にあった太平洋画会研究所の周辺に下宿している。

本郷区根津宮永町から下谷区初音町4丁目へ転居、それ以降は次の順序が定説になっている。

初音町4丁目→下板橋（板橋大山）の炭屋→滝野川（三軒家）の染物屋→牛込区横寺町→板橋町金井窪→昭和6年（1931）長崎町の培風寮に移った。

板橋、滝野川から長崎にかけて、この地域は明治から昭和にかけて行政区分がめまぐるしく変わった。明治11年（1878）に北豊島郡が設置、明治22年（1889）に板橋町・巣鴨町、明治41年

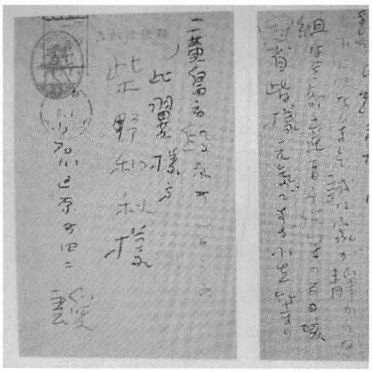

図15－1　柴野利秋へのハガキ（冠省、、、、）

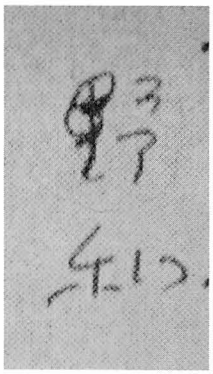

図15－2　［野］

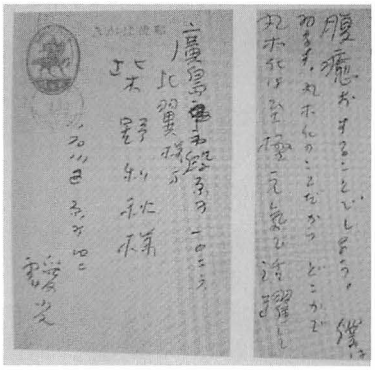

図16－1　柴野利秋へのハガキ（丸木氏、、、、）

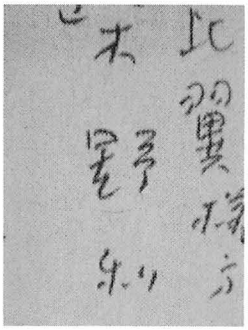

図16－2　［野］

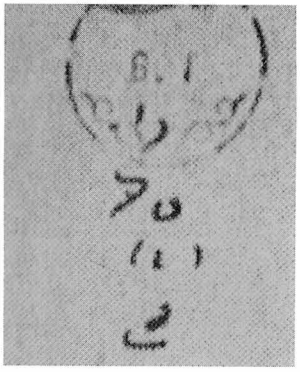

図17　柴野利秋へのハガキ（冠省、、、、）、［川］

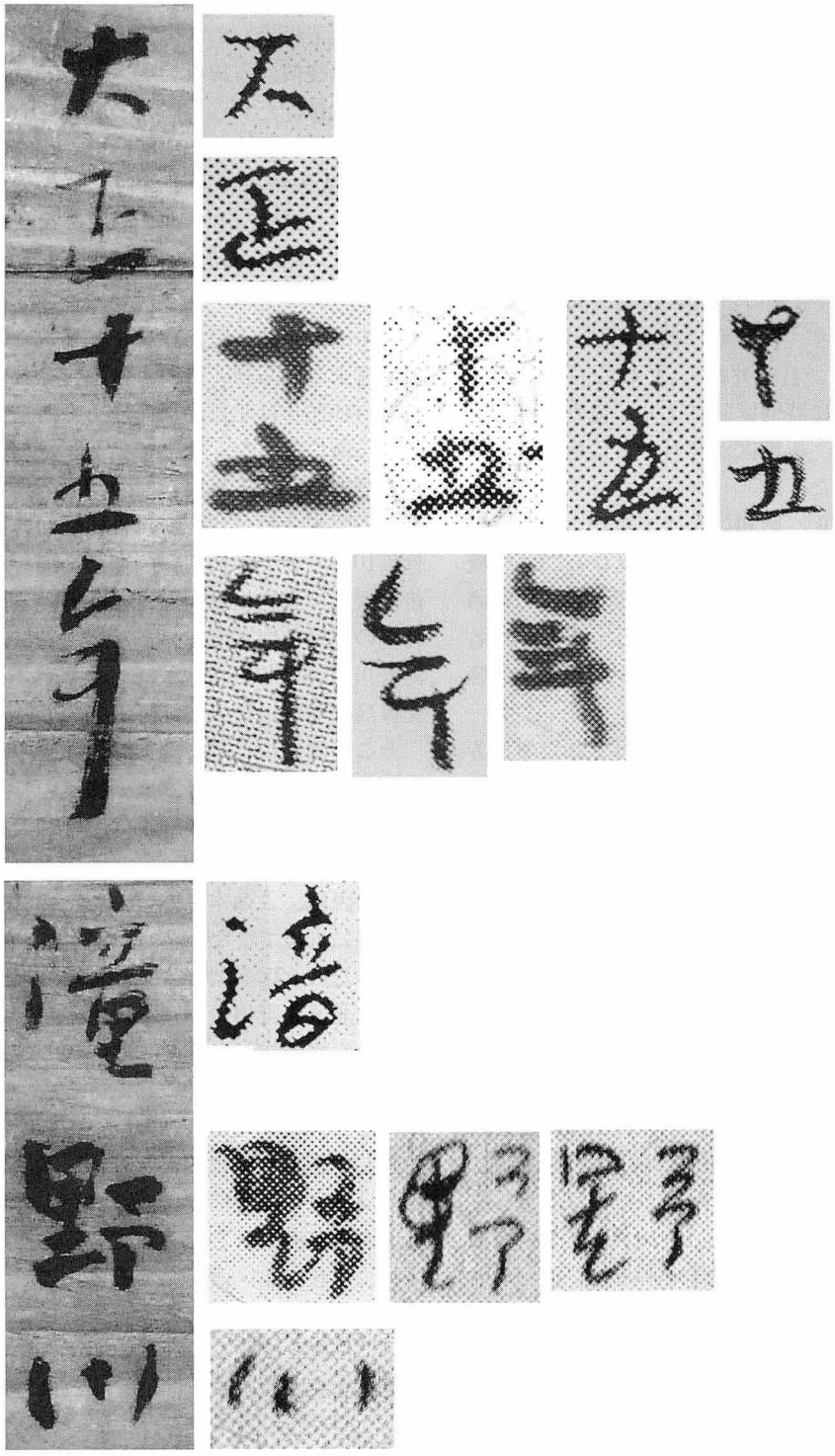

図18　裏板の墨書「大正十五年　滝野川」（左）と文献筆跡（右）の比較

(1908) に王子町、大正２年（1913）に滝野川町、大正７年（1918）に西巣鴨町、大正15年（1926）に長崎町が、それぞれ村から町になった。北豊島郡の役場は現在の板橋区仲宿にあった。

昭和７年10月１日北豊島郡は消滅し、滝野川町は滝野川区に、その他王子区（岩淵町、王子町）、豊島区（巣鴨町、西巣鴨町、高田町、長崎町）、板橋区（板橋町、練馬町、上板橋村、志村、大泉村、石神井村、、、）になった。昭和22年５月３日に特別区制により、滝野川区と王子区は北区に、板橋区が８月１日に板橋区と練馬区に分かれた。

明治から大正、昭和にかけて村から町へ、町から区へ、昭和22年に東京は35区から23区へ統廃合がなされた。このような変遷が靉光の年譜の表記に、当時の地名であったり、現在の地名であったりして、年譜の記述に少なからず影響を与えているようにみえる。

昭和40年に時の美術社から刊行された菊地芳一郎著『靉光』は、靉光の画友や関係者の記述である。そこに書かれた内容を精査すると、これまで定説になっている年譜の再検討の必要性を感じる。

野村守夫の記述（p44－46）

「…やがて靉光は、根津宮永町から初音町四丁目に、それから瀧ノ川、今の北区西ヶ原の三軒家の染物屋の二階に移る。…ついでに書くならば二科13回の時（大正15年、1926）である。靉光は出品したいが、キャンバスがないという。そこで先輩らしい口を利きながら、15号を彼に贈った。彼はそれをとても悦んで４，５日して一作を仕上げて出品した。それが〈ランプがある静物〉で、彼の初入選作であった。彼が北区西ヶ原に居た時代だ」とある。２度にわたって今の北区西ヶ原に触れている。当時は滝野川町西ヶ原である。

井上長三郎の記述（p46－49）

「…靉光が板橋に移るのは二科にはじめて出した翌年（1927）で、その年の二科の制作は板橋大山（下板橋）の私の筋向いの家で描かれたが、その後彼は省線板橋駅近くの二階に七畳の部屋を見付けた」

大野五郎の記述（p49－56）

「…靉光が板橋の近藤勇の墓の２・３軒隣の炭屋の中二階に、２・３人の友と自炊生活していたのは、昭和の初め頃であった」

この三人が語った内容をまとめると、靉光は、根津宮永町から初音町四丁目に、それから大正15年（1926）に北豊島郡滝野川町西ヶ原の染物屋の二階に移った。そこで描かれた〈ランプがある静物〉が、二科展13回の初入選作であった。翌年の昭和２年（1927）二科展14回の作品は下板橋1028の井上の筋向いの家で制作した。その後、靉光は省線板橋駅近く近藤勇の墓の２・３軒隣の炭屋の中２階に移った。ここは北豊島郡滝野川町滝野川2006である。（大正２年以前は北豊島郡滝野川村大字滝野川字西三軒家）

そこで問題になるのは、野村守夫の「瀧ノ川、今の北区西ヶ原の三軒家の染物屋の二階」の解釈である。これまでの解説は三軒家を滝野川字西三軒家と結びつけ、今の北区西ヶ原の染物屋二階の説は、この本以外は一切出てこない。どの年譜にも出てこない。

そのため北区赤羽で生まれ育った大野五郎が、靉光を北区滝野川の下宿を炭屋としているにもかかわらず染物屋とした。その代わりであろうか下板橋の下宿を炭屋にしている。

野村守夫と靉光は広島の谷口印刷所時代からの画友である。昭和19年５月、靉光は応召に際して受け取った餞別控に、野村守夫の住所を豊島区西巣鴨四丁目と記載している。西巣鴨四丁目は、現在の北区西ヶ原と近藤勇の墓のある北区滝野川七丁目の間にある。両者は東と西の正反対に位置している。西巣鴨四丁目に住んでいた野村守夫が西と東を間違えるとは考えられない。

大正初めの地図を見ると、現在の北区西ヶ原に位置する霜降橋付近の南側は上駒込字三軒家

である。霜降橋の地名が示すように、昭和15年に暗渠になるまで、そこには川が流れ、橋があった。その川の下流は藍染川と呼ばれ、不忍池に流れ込んでいた。実際、川沿いにかつて藍染屋があったことが知られる。染物屋は川沿いにあるのが普通である。近藤勇の墓の側で染物屋をすることは考えにくい。

靉光とは広島時代からの画友であった野村守夫（1904-79)、靉光の代表作の自画像を応召に際して託した井上長三郎（1906－95)、現在の赤羽に生まれ、靉光とも交流のあった大野五郎(1910－2006)、それぞれの言葉は貴重である。彼らの記述を再検討する必要がある。

大正末から昭和7年までの滝野川地域を図19に示す。

4．まとめ

本報で検討した絵画資料「大正十五年　滝野川　靉光」を通して、靉光は下谷区初音４丁目から、すぐに下板橋へ転居したしたのではなく、その間の大正15年に滝野川町西ヶ原に住んでいた可能性があること。

靉光は昭和５年（1930）の二科展に石神井川を描いた「滝野川風景」を出品している。滝野川は地域の地名であって川の名ではない。明治期は滝野川村、大正から昭和初期は滝野川町、その後滝野川区になり、戦後、王子区と合併して北区になった。この絵画資料は大正15年の滝野川町区域内の景観である。当時レンガ造りは軍施設や官公庁の施設に使われることが多かった。描かれた施設は特定できないがレンガを描いた場所は限られている。

裏板に「大正十五年　滝野川　靉光」に書かれた８文字の筆跡と靉光の書簡類、メモ書きの筆跡と比較すると、その文字の特徴に共通性が認められよう。

この絵画資料には対象物のとらえ方にデッサン習練の成果が感じられる。大正15年の靉光は自らの画風を求めて太平洋画会研究所でデッサンの基礎を積み上げていた時代である。研究所に隣接し、居住していた可能性のある滝野川地区を画題にした可能性はある。

今後は関係機関の協力を得て、原資料あるいは公開されていない作品の細部との照合を期待したい。

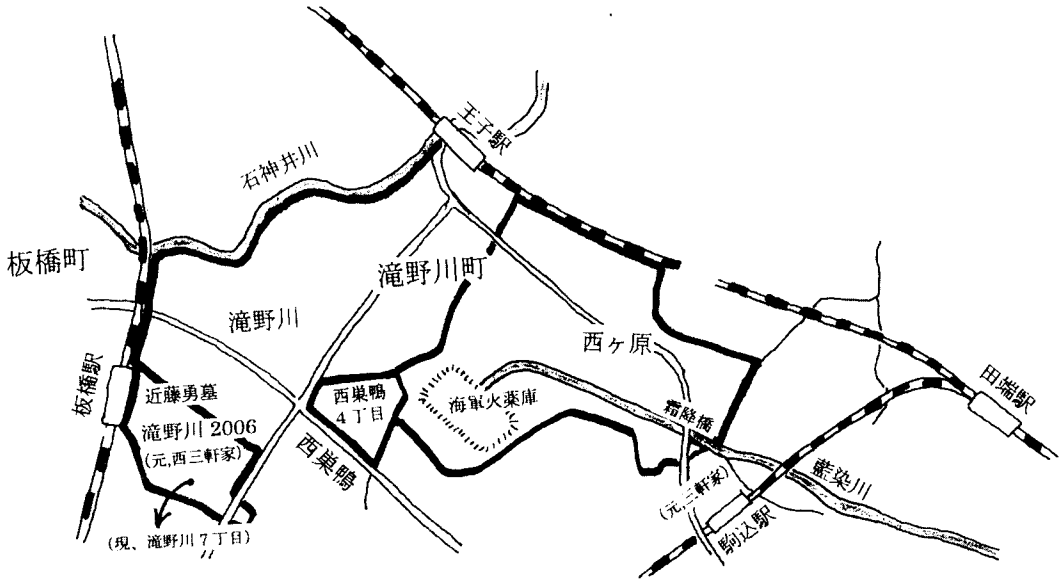

図19　大正末から昭和7年までの滝野川地域の図

〈付記1〉

靉光と西ヶ原を結びつける事実がある。靉光は上京するまで広島市鉄砲町に住んでいた。一方、滝野川町西ヶ原には大正3年（1914）まで下瀬火薬製造所があった。その後海軍火薬庫になっていた。日露戦争で威力を発揮した下瀬火薬の発明者、下瀬雅允（まさちか）は広島鉄砲町の出身であった。その地は昭和15年に東京外国語学校に、近年まで東京外国語大学の校地であった。また、そこから流れ出る湧き水は下流で藍染川になり、上野の不忍池に流れていた。

〈付記2〉

この絵画資料は出所不詳であるが、2005年まで北区田端新町で古物商を営んでいた業者が2003年頃にセリ市で入手し、倉庫に保管していたものと分かった。田端新町は、かつては滝野川町、滝野川区であった。業者は当時、日々さまざまなセリ市に参加し、その作品を何処から入手したか覚えていないが、「滝野川」のタイトルを見て郷土意識から購入したのだと思う、とのコメントを得た。

〈参考文献〉

1）美術新報　4月号　昭和5年（1830）
2）美術新報10月号　昭和5年（1830）
3）美術新報　4月号　昭和6年（1831）
4）松原宏遠『下瀬火薬考』北隆館（1943）
5）「靉光遺作展」北荘画廊（1949）
6）芸術新潮　4月号（1956）
7）美術手帖　11月号（1953）
8）芸術新潮　7月号（1964）
9）芸術新潮　11月号（1964）
10）菊地芳一郎『靉光』時の美術社（1965）
11）芸術新潮　11月号（1967）
12）芸術新潮　6月号（1969）
13）芸術新潮　2月号（1973）
14）芸術新潮　10月号（1974）
15）芸術新潮　3月号（1975）
16）「戦後美術の出発」東京都美術館（1977）
17）芸術新潮　3月号（1978）
18）「靉光」みづゑ　no.877　4月号（1978）
19）「靉光展」東京新聞（1979）
20）「井上長三郎」板橋区立美術館（1980）
21）芸術新潮　9月号（1980）
22）芸術新潮　10月号（1980）
23）芸術新潮　8月号（1983）
24）芸術新潮　1月号（1985）
25）芸術新潮　12月号（1987）
26）三彩　8月号（1988）
27）「靉光　青春の光と闇」広島県立美術館（1988）
28）「靉光　揺れ動く時代の痕跡」徳島県立美術館（1994）
29）芸術新潮　6月号（1994）
30）芸術新潮　8月号（1995）
31）芸術新潮　9月号（1995）
32）「靉光　人間のいる絵」南天子画廊（1998）
33）「昭和の時代を見つめた目　靉光」毎日新聞社（1998）
34）生誕100年「靉光展」毎日新聞社（2007）
35）BM/美術の杜　星雲社　8月号（2007）
36）「新人画会展」板橋区立美術館（2008）